第３章 新市建設の基本方針

１．新市建設の理念と将来像

（１）新市建設の理念

渋川地区は、赤城山、榛名山、子持山、小野子山に抱かれ利根川と吾妻川の水辺の豊かな自然を有し、日本そして群馬県のほぼ中央部にあたり、古くから交通の要衝として栄えてきました。そして、昭和の大合併時（昭和 29～35 年）に現在の市町村単位となっており、渋川市における交通、商業、産業、医療等をはじめとした諸都市機能の集積を活かした生活圏としての結びつきや、昭和 46 年からは、本地区と吉岡町、榛東村の８市町村により渋川地区広域市町村圏振興整備組合を設立し、現在 17 の事業を展開し、施策連携を図るなど既に一体的な都市としての性格を有しています。

こうした一体性を有しながら、我が国経済の高度成長を背景として、昭和 57 年に上越新幹線の開通（高崎駅）、昭和 60 年には関越自動車道渋川伊香保 IC、赤城 IC の供用開始により、更なる広域的な交通網の整備が進められ、また、県都である前橋市や高崎市にも近いことから、両都市の住宅地開発の外延化による市街化の進展も見られました。

しかし、我が国の経済･社会の成熟化の進展と低成長時代への移行､そして自分たちのまちのことは自分たちで決めるという地方分権が時代の潮流となる中で、自治体としての自立性や能力の向上に取り組むとともに、厳しい財政状況にも対応できる、たくましい行財政基盤の確立を図ることが強く求められています。

また、住民の方々の価値観や生活スタイルの多様化、少子高齢化の一層の進行、広域的な交通網の整備や情報通信手段の発達による生活圏の拡大化、更に急速に進展する国際化の波の中で、本地区を取り巻く社会環境は急速に変化しており、地域コミュニティの活力の維持や生活サービス等の充実、地区の活力を支える新たな産業の確立を図るなど、安定した社会基盤を維持していくことが求められています。

このような現状や課題に的確に対応していくためには、一体的な都市としての性格を活かしながら､新しい時代に対応した地域経営のあり方を確立していくことが必要であり､合併がその有効な対応策です。

このため､合併により以下のようなまちづくりを進めることにより､渋川地区のそれぞれの地域が個性を発揮しつつ相互に連携を強め、恵まれた立地条件と豊かな自然を活かしながら、地域の活力を維持･創造し、いつまでも住み続けられる生活環境づくりを進めていきます。

「自然に抱かれたやすらぎのまち」

新市は、赤城山、榛名山、子持山、小野子山に抱かれ、ほぼ中央部を吾妻川、利根川が流れる、緑と水の豊富な自然環境に恵まれています。そしてこの雄大な景観は、市民にとって共通の「ふるさと」を想起させる要素でもあることから、この自然環境を未来にわたっても保全し、守っていきます。

「安全・安心ですこやかに暮らせるまち」

新市は、温泉をはじめとした多くの観光資源や歴史資源を有し、農作物の生産の場ともなっています。こうした地域の資源である自然・歴史・文化を身近に感じ、生活環境の安全性や福祉・教育環境を充実させ、いつまでも心健やかに住み続けられる環境づくりを目指します。

「地域の連携と活力があふれるまち」

新市は、日本そして群馬県のほぼ中央部にあたり、古くから交通の要衝の地として栄え、鉄道や高速道路交通網が整っています。この恵まれた交通条件を活かし様々な人々の交流を受け止め、新市の各地域がそれぞれの役割分担のもとに、新たな活力の創出を目指します。

「市民がつくるふれあいのまち」

これからのまちづくりの主役である市民が、地域ごとに支えあって、活気あるコミュニティをつくり、相互交流の盛んな、ふれあいのあるまちづくりを目指します。

（２）新市の将来像

新市建設の理念を総括し、住民･行政が共有すべき新市の将来像として、４つの理念を短いセンテンスに分解し、更に要約される文章としてまとめたものを「将来像」として設定します。

《将来像》

やすらぎとふれあいに満ちた
“ほっと”なまち

（設定の考え方について）

「やすらぎ」で自然と健康、安全・安心を表し、「ふれあい」で交流、コミュニティ、文化を表し、「ほっと」で産業、活力さらには温かさ、情熱、温泉、スローライフを表し、これらの魅力にあふれたまちをイメージします。

２. 新市建設の基本的施策

（１）新市建設の基本的施策

新市の将来像を実現していくための、施策実施に向けた基本方向について、概況把握、住民意識調査結果、上位計画に位置付けられている施策等を勘案し、以下に示す①～⑧の分野として設定します。

①人にやさしく便利で快適なまちづくり・・・道路・交通などの都市基盤整備分野

（設定の背景）

●現況動向

JR 上越線、JR 吾妻線、関越自動車道等の広域交通網は整備されていますが、これにアクセスする地区内の幹線道路の渋滞や、市街地や集落地以外と地区北部の山間地における道路整備が進んでおらず、地区全体としての道路網の充実が求められます。

また、特に山間部等での地域住民の重要な交通手段となるバス運行の充実が必要です。

②美しく豊かな自然と共生するまちづくり・・・自然環境分野

（設定の背景）

●現況動向

本地区は、赤城山、榛名山、子持山、小野子山に抱かれた山麓の地にあり、ほぼ中心を貫くように利根川、吾妻川が流れ、山地と河川が織り成す雄大な自然環境に恵まれています。

また山麓の斜面や丘陵地が多く観光施設、公共施設の立地、農地や集落地として多用な利用も見られます。

③快適でやすらぎのあるまちづくり・・・生活環境分野

（設定の背景）

●現況動向

本地区は豊かな自然環境と交通利便性を有し、また大きな災害等も比較的少ないことから、住みやすい土地柄を有していると言えます。しかし一方で、生活道路・下水道などの基盤施設未整備地区の存在や、日常生活利便施設の不足もみられ、自然に恵まれた都市的利便性も確保された生活環境づくりが求められます。

④健やかで温かな暮らしのあるまちづくり・・・健康・福祉分野

（設定の背景）

●現況動向

少子高齢化の進行が見られる中で、福祉、医療体制に対するニーズはますます高まる一方、医療や福祉施設への交通利便性の問題や、地域の拠点施設としての病院整備など、地区内の総合的な福祉、医療環境の充実が求められます。

⑤豊かな心と個性ある伝統・文化を育むまちづくり・・・教育・文化・スポーツ分野

（設定の背景）

●現況動向

本地区は豊かな自然に恵まれ、これを背景とした豊富な先人文化があり、地区の特性として守り育んでいくべき要素です。また自然を生かした体験交流の場の拡充や、少子化の状況にあって教育環境の充実に対するニーズは高く、その対応も求められます。

⑥地域資源と連携による活力あるまちづくり・・・産業分野

（設定の背景）

●現況動向

主要産業の停滞や、中心的な商業地の衰退傾向が強まる中で、本地区には渋川市や子持村の工業、伊香保町の温泉観光、赤城村、北橘村の農産物、小野上村の林業など、地域の特性となっている産業基盤が数多くあり、これらの維持とともに相互連携等による新たな展開が求められます。

⑦参加とふれあいで築くまちづくり・・・コミュニティ・市民参加分野

（設定の背景）

●現況動向

本地区は山々に囲まれた地形としての一体性の中で、それぞれの地域固有の生活文化を営んできました。新市においてもこうした既存コミュニティを大事にしながら、相互理解のもとに新たなまちづくりを進めていくことが求められます。

⑧協働と効率化で進めるまちづくり・・・行財政運営

（設定の背景）

●現況動向

逼迫する財政状況の一方で、多様化する市民ニーズや少子高齢化に対応した行政サービスの維持充実のため、行財政運営におけるより一層の効率化や、行政・市民との相互理解と役割分担のもと、地域のまちづくり、公共サービスにおける積極的な市民参加等を進めていく必要があります。

（２）地域別まちづくりの方向

渋川地区全体の将来像、基本的施策の設定とともに、構成市町村を単位とした、地域別のまちづくりの方向を以下のとおり整理します。

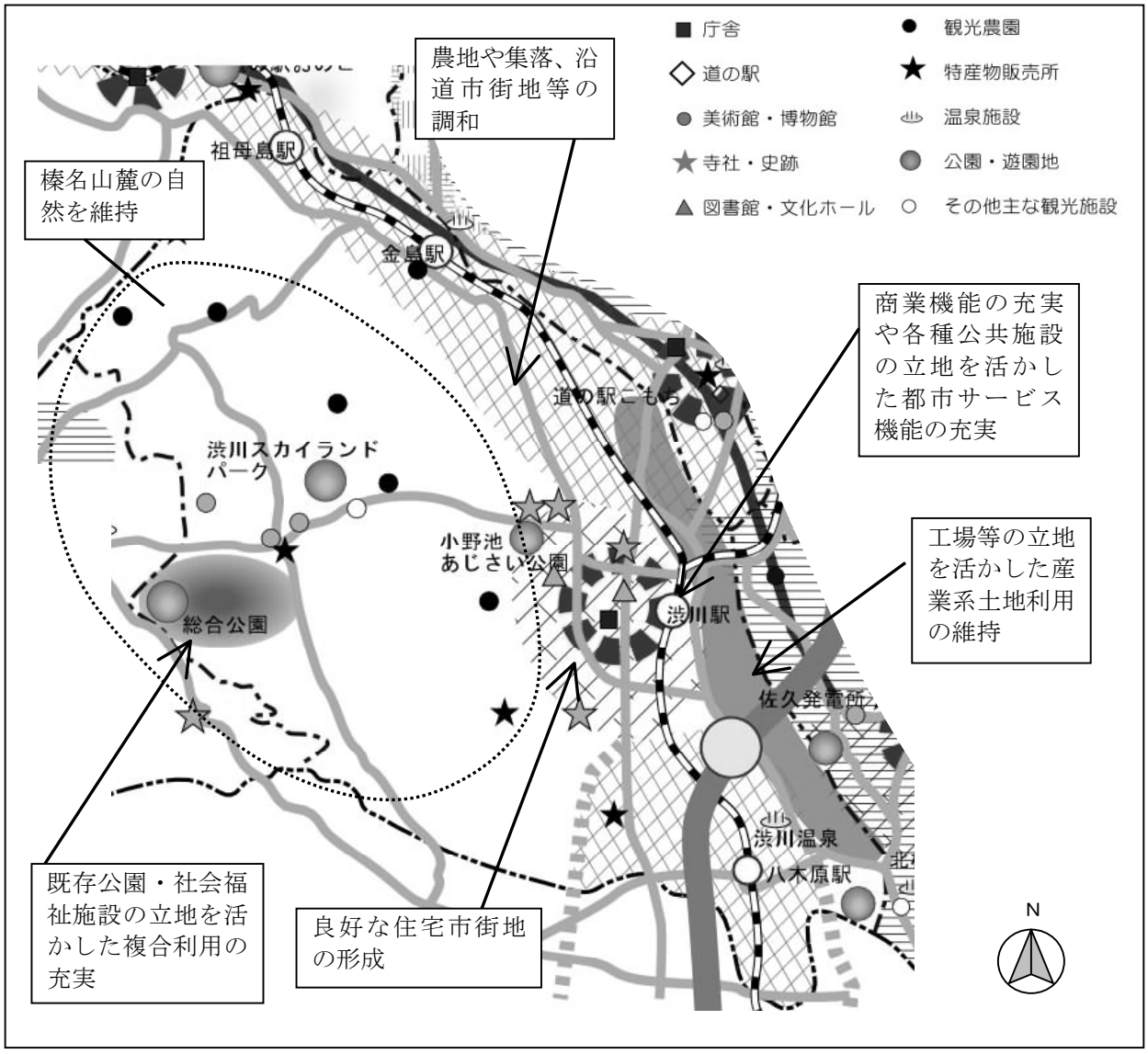
【渋川地域】

交通利便性と都市機能の集積を活かした、交流と活力のあるまちづくり

渋川地域は榛名山麓と利根川、吾妻川の河川に囲まれた豊かな自然に恵まれ、日本、群馬県のほぼ中央、そして鉄道駅、高速道路 IC による交通利便性、工業・商業等の産業機能が集積しています。

新市においては、渋川地区における位置的、機能的な中心地として、**中心市街地の活性化**、**都市・地域間の連携を支える道路整備や交通機能の充実**や、自然との調和に配慮しつつ、鉄道駅の周辺利用や**各種の公共施設の立地を活かした生活利便性の向上**や、**住宅地の改善・整備などによる居住環境の向上**を目指します。

■概念図



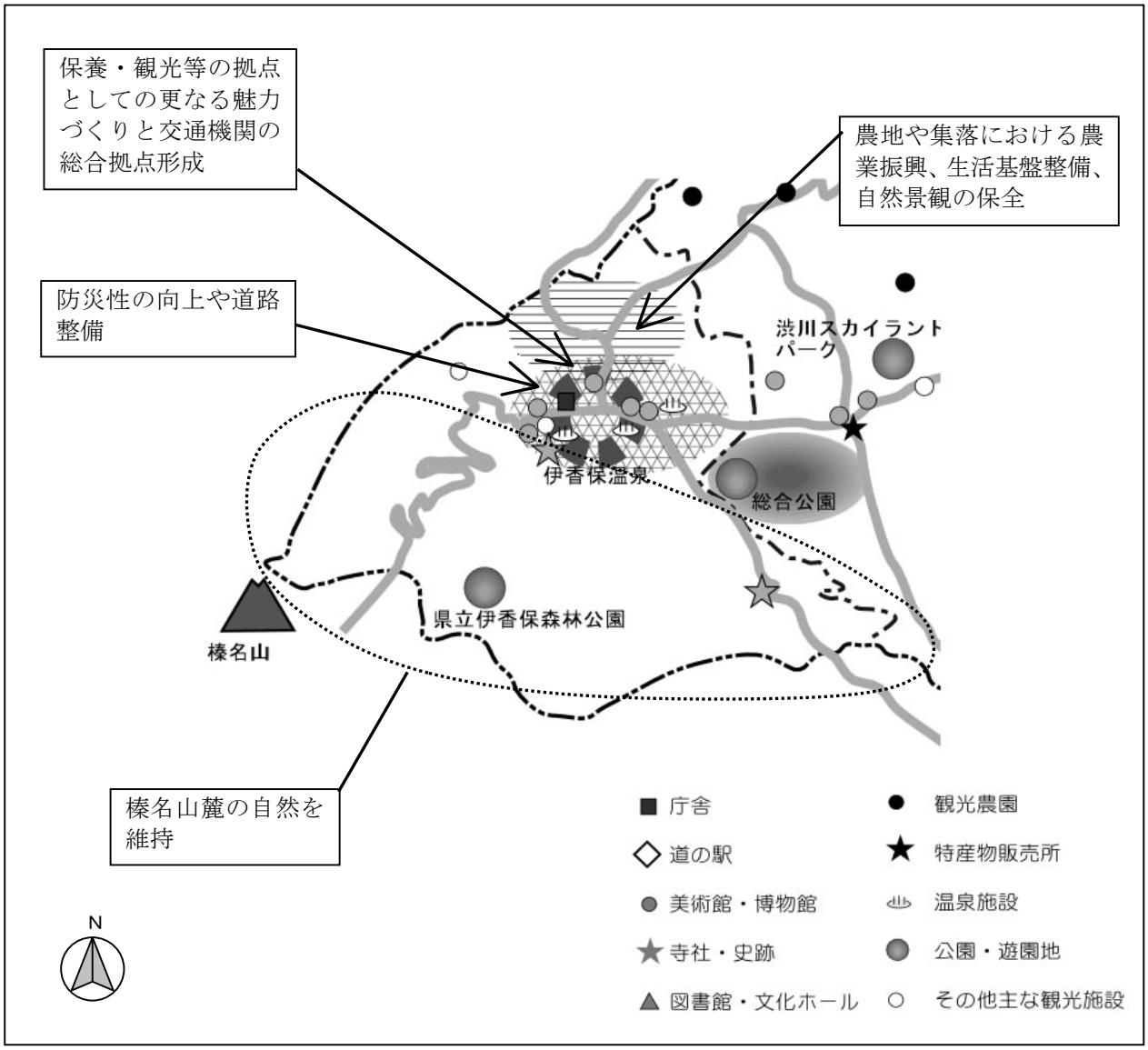
【伊香保地域】

豊かな温泉と歴史性を活かした、温りのある住みやすいまちづくり

伊香保地域は、榛名山麓に抱かれる豊かな自然と温泉資源に恵まれ、古くからの歴史も有する温泉保養地です。

新市においては、渋川地区における**保養・観光等の拠点として更なる魅力づくり**などを図っていくとともに、中心市街地における**交通機関の総合拠点形成**、**防災性の向上**や**道路整備**、**自然と調和した集落地の保全**など、住みよいまちづくりを目指します。

■概念図



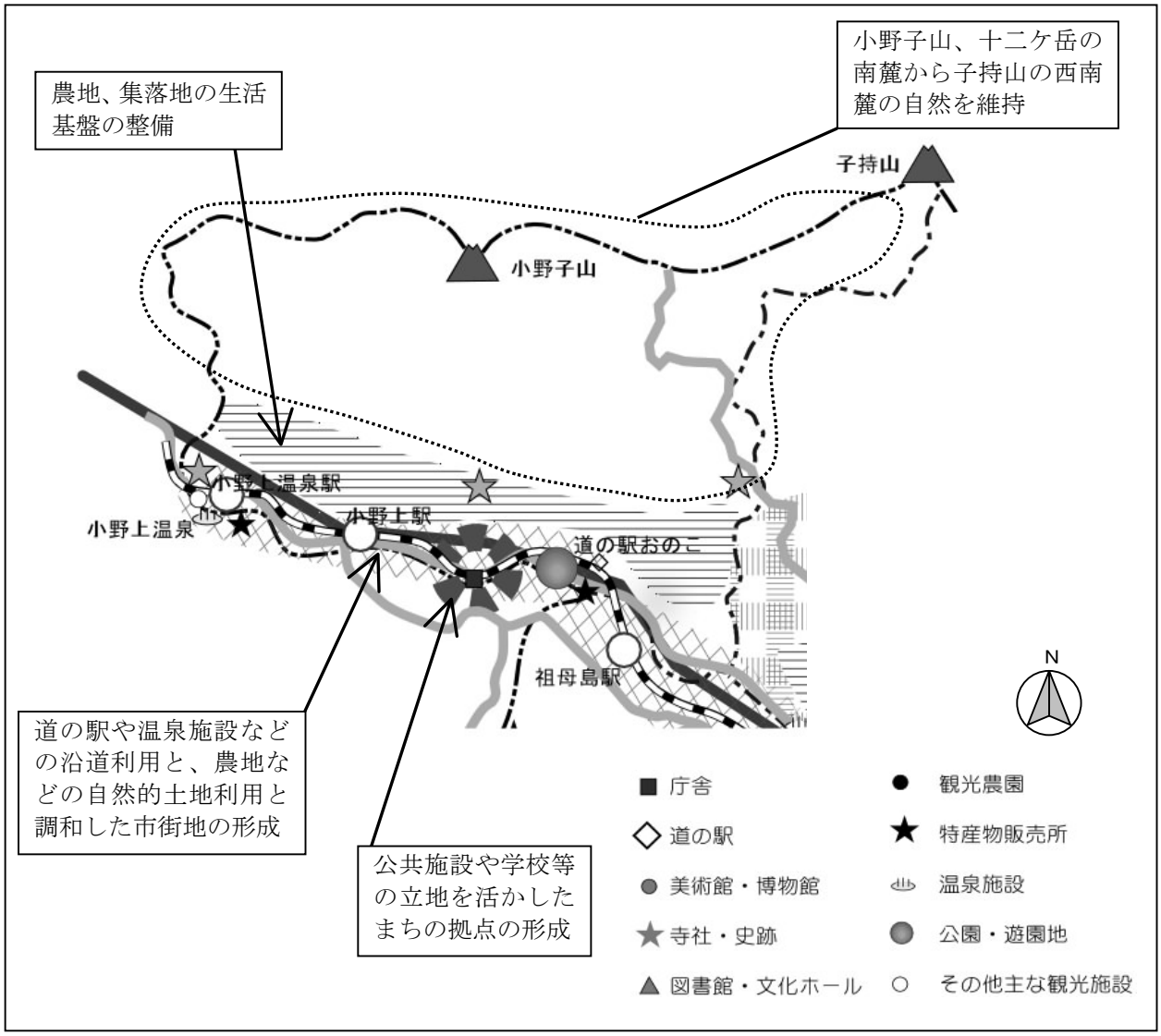
【小野上地域】

豊かな自然と共生し、健康に暮らし憩いのあるまちづくり

小野上地域は、小野子山、十二ケ岳の南麓から子持山の西南麓に広がっており、南に吾妻川が流れ、花き、果樹、きのこ類などの農業が盛んです。地域内には２つの鉄道駅、道の駅、温泉施設があります。

新市においては、**小野子山南麓から子持山西南麓の豊かな自然を維持・保全**していくとともに、**温泉施設や公共施設の改善**等を図りながら、**まちの中心となる拠点の形成**や交通網の充実を目指します。

■概念図



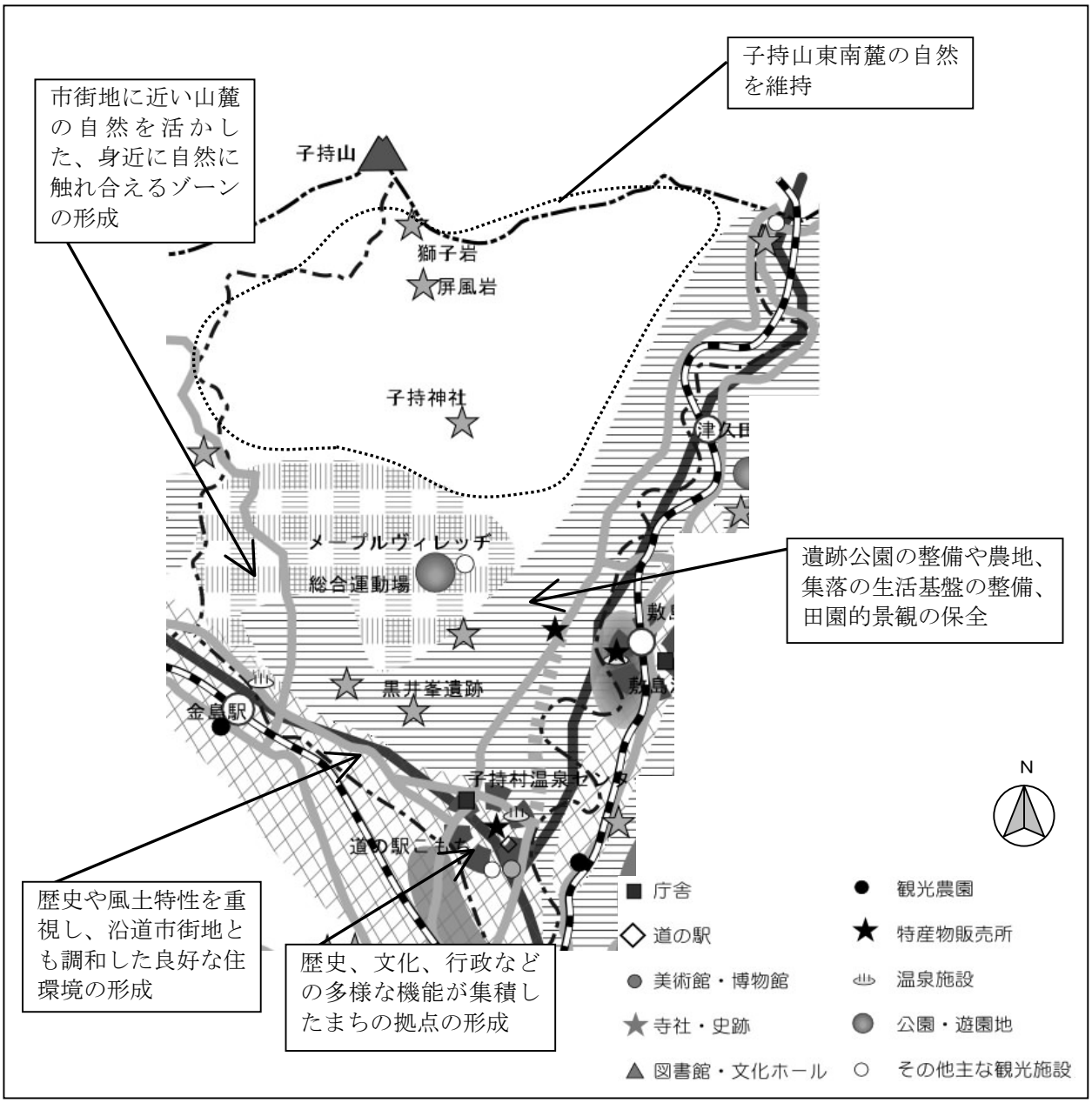
【子持地域】

自然と歴史資源を活かした、健康で住みよいまちづくり

子持地域は、子持山東南麓一帯に広がっており、利根川と吾妻川に挟まれ、渋川市と赤城村に接する部分に白井城址として城下町・宿場町の歴史を有する市街地が形成されています。

新市においては、**子持山東南麓の豊かな自然を維持**し、渋川市に隣接し都市的利便性の比較的高い立地条件を活かした**まちの生活拠点の形成**、**良好な居住環境の形成**や**黒井峯遺跡、白井城址周辺整備**、花と食のむらづくりなど**歴史・自然資源を活かす**まちづくりを目指します。

■概念図



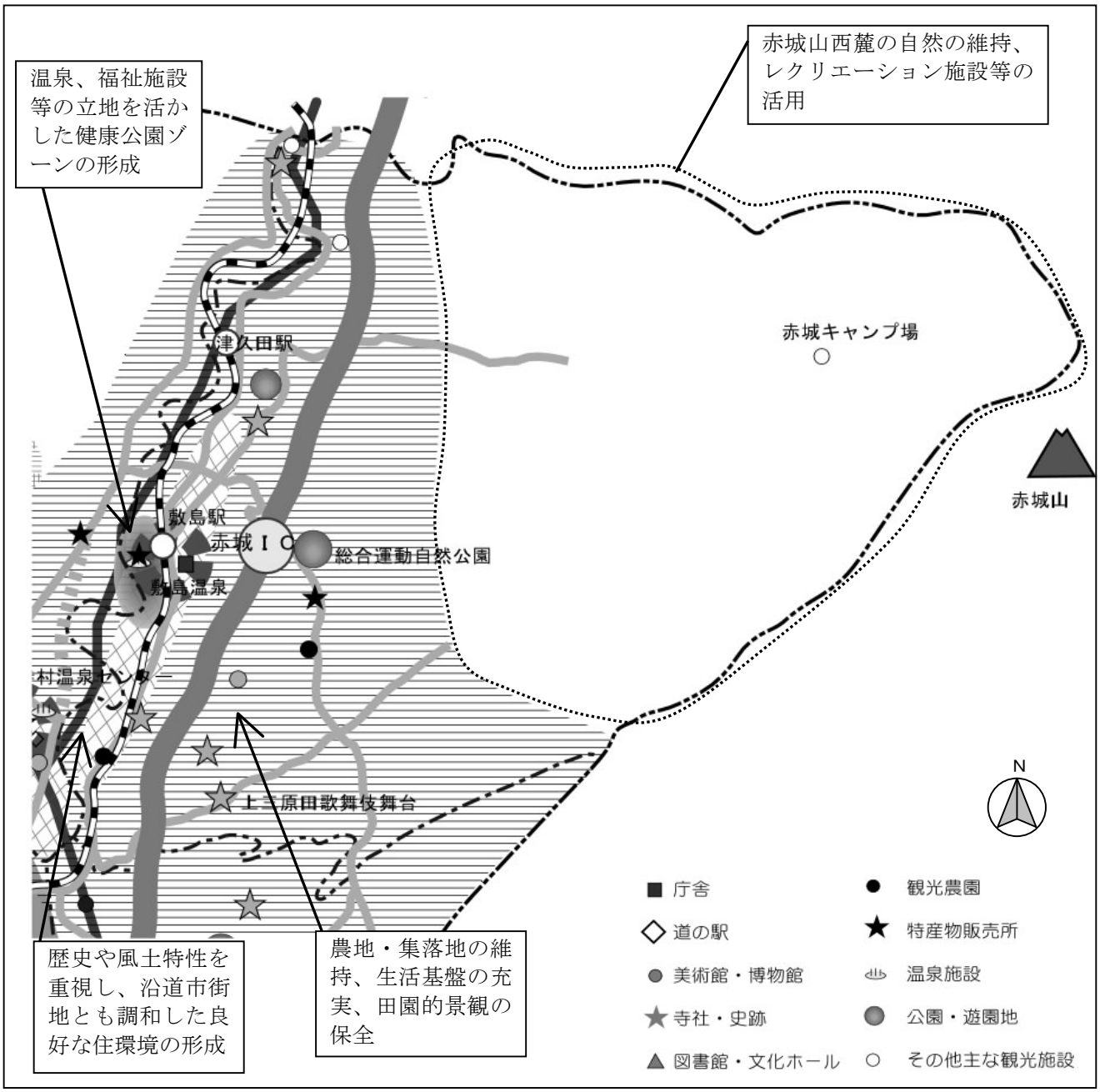
【赤城地域】

自然と産物の恵みと交通利便性を活かし、いきいき暮らすまちづくり

赤城地域は、赤城山西麓に広がり、西に利根川が流れ、鉄道駅、高速道路 IC が立地し高い交通利便性と、温泉施設や、イチゴ・リンゴなどを主とした観光農業を展開しています。

新市においては、**赤城山西麓の豊かな自然や産物を観光資源として一層活かしていく**とともに、温泉施設等を活用し**健康公園ゾーンの形成**や、**地域福祉の充実**と**生活環境の向上**を目指します。

■概念図



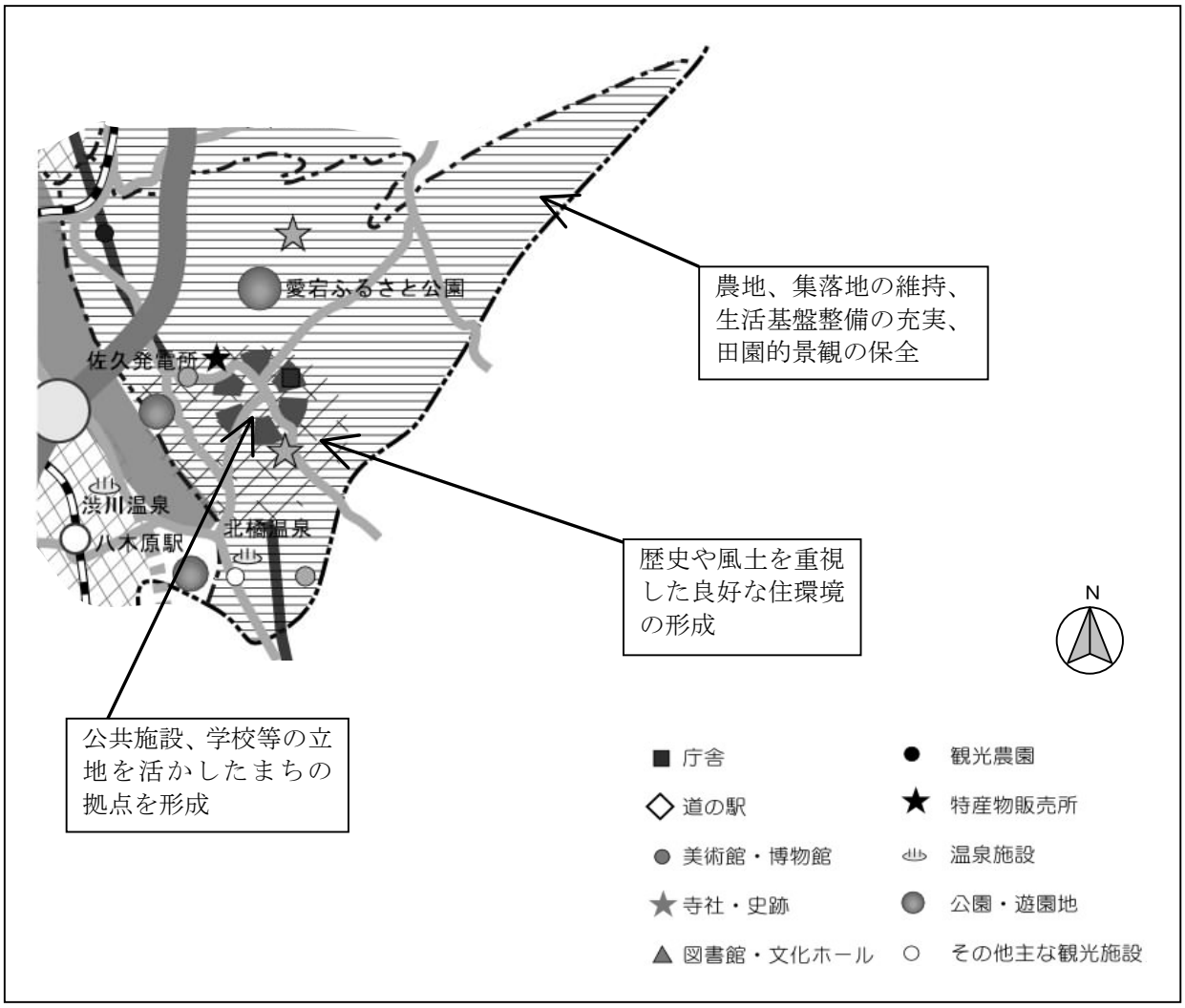
【北橘地域】

身近に自然が感じられ、美しく豊かに暮らすまちづくり

北橘地域は、赤城山西南麓のなだらかな斜面地に広がる穏やかな農村集落地でしたが、近年渋川市、前橋市のベットタウンとして、宅地化の進行が見られています。

新市においては、**赤城山西南麓の豊かな自然や農地などの維持・保全**により、身近に自然が感じられる良好な居住環境の形成を図るとともに、**温泉施設等を活かした地域福祉の充実**、**まちの生活拠点の形成**や、公共交通網の充実を目指します。

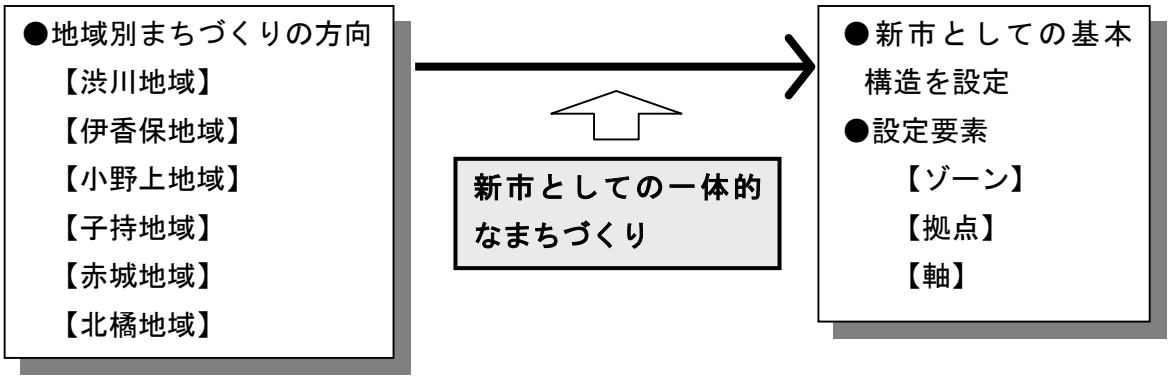
■概念図



３.新市の将来都市構造（土地利用等）

（１）基本的な考え方

新市の将来都市構造（土地利用等）については、新市のまちづくりの前提条件となる基本構造を示すものとし、以下の考え方に基づき設定します。



※新市としての一体的なまちづくりの考え方

○新市の豊かな自然や農業等の生産環境を一体的に保全

新市の土地利用の大部分は赤城山、榛名山、子持山、小野子山に囲まれた緑豊かな山林を保全することにより、現在の自然的土地利用を維持します。また、山麓の斜面や丘陵地では、牧畜や果樹、高原野菜などの農業が営まれるなど、自然と人々の営みが一体となった環境が形成されており、農地などの生産環境、集落などの生活環境の特性に応じ、維持・保全していきます。

○新市の求心性や交流を高める既存拠点の充実

新市は、交通ターミナル拠点、温泉・レクリエーションなどの特徴的な拠点地区が同居することになり、これらを新市全体における「拠点」として位置付けます。

特に渋川駅及び渋川伊香保 IC 周辺については、多くの人が集まり、行き交う魅力的なエリアとして産業、文化などの都市機能の集積を図ったり、伊香保地域では、文化と歴史の集積と榛名山麓の優れた自然を活かし、保養・リゾート拠点として充実するなど、各地域の拠点機能の維持・連携・充実を図ります。

○市民生活の利便性を向上させる拠点づくり

新市における一層の居住環境の向上に資するよう、渋川地域を中心としてその周辺部に位置する、小野上地域、子持地域、赤城地域、北橘地域おいて、生活居住機能の充実による拠点の形成を図ります。

○新市内の有機的交流を促すネットワーク強化

新市は山々に囲まれ、市街地が限定的・散在的に形成されるなかで、先に示す各拠点の形成とともに、国道 17 号、国道 353 号を主体に、県道や一部市町村道を活かして各地域の連携を促進し、限られた市街地の有効利用を促進します。

（２）設定について

基本的考え方をふまえ、新市の土地利用は、自然保全ゾーン、山麓ゾーン、市街地ゾーン、産業ゾーン、複合利用ゾーンの概ね５つのゾーンに区分して、計画的な利用や現在ある環境の保全等を図ります。

各ゾーンの設定とともに、新市の様々な都市機能をバランスよく配置・集約するとともにそれらが相互に連携するよう、拠点と都市軸についても設定します。

なお、新市後の総合計画において、本検討をふまえ、より詳細かつ具体的に検討するものとなります。

（３）ゾーン形成（土地利用）の方針

①自然保全ゾーン

赤城山、榛名山、子持山、小野子山で構成される山々において、現存する自然環境の保全により、緑の保全、水源涵養、保健休養、体験学習などの森林の持つ多様な機能の維持を図ります。

②山麓ゾーン

自然ゾーンと市街地ゾーンの境界にあたる範囲において、基盤整備の進んだ農地や農村集落地の保全や、観光・レクリエーション施設等の立地を活かし、自然と共存した多様な土地利用を図ります。

③市街地ゾーン

渋川駅を中心とする一帯の市街地、伊香保地域の中心部、利根川、吾妻川沿いに形成される小野上地域、子持地域、赤城地域、北橘地域の既成市街地の範囲において、計画的な土地利用や市街地内の良好な居住環境の維持・改善を図ります。

④産業ゾーン

関越自動車道渋川伊香保 IC 及び赤城 IC 周辺や国道 17 号沿道については、工業地などの産業拠点を集約的に配置し、周辺環境との調和や周辺の緑と共存する市街地の形成を図ります。

⑤複合利用ゾーン

榛名山東麓の丘陵地、子持山南麓、JR 敷島駅周辺一帯については周辺環境と共存した新たな観光レクリエーション利用や医療福祉に関する施設利用等を図るゾーンとして位置付けます。

（４）拠点形成の方針

①都市拠点

JR渋川駅周辺の市街地について、鉄道等の交通利便性や既存の商業施設立地を活かし、新市の中心市街地として、その機能の充実を図ります。

②保養リゾート拠点

伊香保地域の温泉街を形成する石段街周辺や幹線道路沿道を中心に、商店や宿泊・観光施設などの集客交流施設が集積する保養・健康リゾート拠点の充実を図ります。

③地域の中心拠点

地域生活の拠点となる本庁・支所などの公共施設が集積する地区について、歴史、文化、行政等の様々な機能の維持・充実を図ります。

（５）軸形成の方針

①都市軸

国道17号、国道353号、主要地方道渋川松井田線、主要地方道渋川大胡線を、新市内そして周辺地域との交流を支える新市全体の骨格的な軸として位置付けます。

②連携軸

新市内の中心部周辺における交通網の強化及び山麓に分布する観光施設等の連携を促進する軸として位置付けます。

③幹線軸

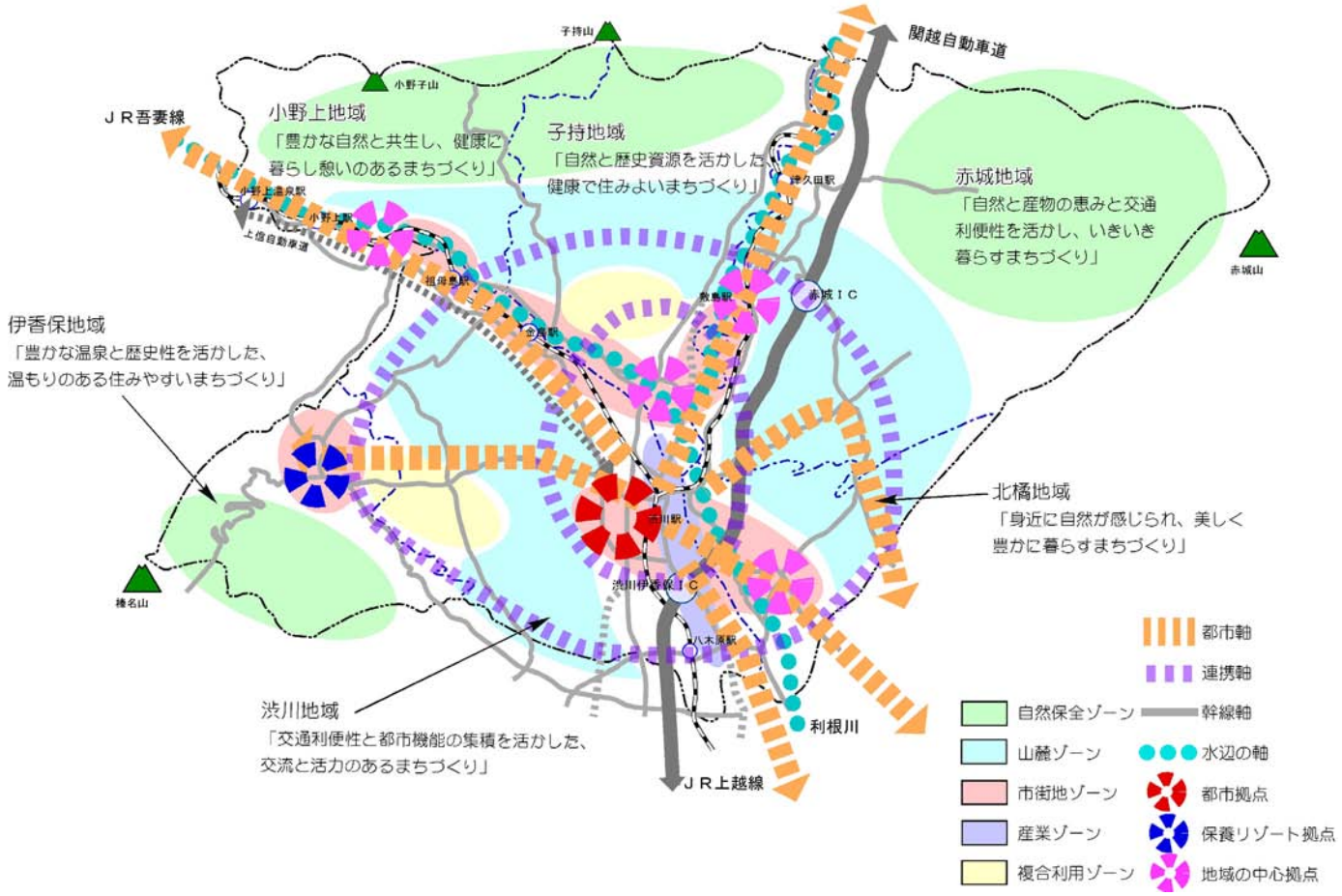
都市軸、連携軸とともに新市の各地域を結ぶ主要な道路を位置付けます。

④水辺の軸

新市の中央部を流れる利根川、吾妻川については、新市の市街地に隣接し、生活に身近な自然資源であることから、治水面での河川整備の充実とともに、生態系への配慮、親水性の向上、レクリエーション利用など、多様な活用を図る軸として位置付けます。

■将来都市構造図

土地利用構想として、『地域別』の整備方針を示し、新市として必要となる各種機能の集積を図る『拠点』と、骨格となる『都市軸』について、担うべき役割と整備の方向性を示します。



ゾーン別整備方針

①自然保全ゾーン

現存する自然環境を保全し、森林の持つ重要な機能の維持を図ります。

②山麓ゾーン

自然と共存した多様な土地利用を図ります。

③市街地ゾーン

計画的な土地利用や良好な居住環境の維持・改善を図ります。

④産業ゾーン

産業拠点を集約的に配置し、周辺環境との調和する市街地の形成を図ります。

⑤複合利用ゾーン

新たな観光レクリエーションや医療福祉に関する施設利用等の地域に位置付けます。

拠点の形成方針

①都市拠点

鉄道等の交通利便性や既存商業施設立地を活かし、新市の中心市街地として機能充実を図ります。

②保養リゾート拠点

集客交流施設が集積する、保養・健康リゾート拠点の充実を図ります。

③地域の中心拠点

歴史、文化、行政等の様々な機能の維持・充実を図ります。

都市軸の形成方針

①都市軸

国道 17 号、国道 353 号、主要地方道渋川松井田線、主要地方道渋川大胡線を新市全体の骨格的な軸として位置付けます。

②連携軸

新市全体の交通網の強化及び山麓に分布する観光施設等の連携を促進する軸として位置付けます。

③幹線軸

都市軸、連携軸とともに新市の各地域を結ぶ主要な道路を位置付けます。

④水辺の軸

利根川、吾妻川について、レクリエーション利用など、有効的な活用を図る軸として位置付けます。